
ホラーリン

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホラーリン

【Nコード】

N0975F

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

シックスセンスを持つ男イチマツこと（九割打撃）は、自分の勘を信じて会社をやめ、記者になることにした。しかし、その会社はイチマツが思っていたようではなく、ホラー映像記者にならされてしまった。しかし、いい先輩や友達ができて……。

「ブローク」

「私、ヤマトは本日をもってこの会社を辞めます」

「いままでよく頑張ったね」

「いやー、社長僕は運命に従うまでです。僕は第六感を信じていますから」

僕には第六感があつた、題名をシックスセンスにしてもよかったのだけど、この小説にはリズムというものがある、この小説なりの平凡な日常を超えて、僕はいつもと違う仕事に就くことを第六感に勧められた。

スーパークレーン記者……。

「スーパークレーン記者つてここですか？」

僕は中に入った。もう契約済みだ。

「よく来たねえ、誰でも間違えるんだよ。よろしく頼むよ、打撃君」

そう、僕の名前は九割 打撃。

「この会社の打撃王になつてくれたまえ」

「ああ、もちろんです」

結構強引な社長だ。どんどん会社の奥へ引つ張られる。

まあ、意外と几帳面な会社だ、なぜなら片付いている。それに仕事もはかどっているようだ、ランキング表があつたから分かった。

推理すると、ずばり僕の仕事はたいしたことない。でも、それがいいってことは第六感でわかつているのだ。

「君の机はここ、ちなみに君の所属する部はホラー記者部だ。君にはバットで幽霊と戦ってもらつ」

えー……、本当に？

「あの、何かの間違いじゃ」

「君の実績は聞いていたし、君の能力があれば確実にホラーブームが巻き起こる。前の会社でも有能だったんだから、できる」

決め付けられてる、まっ分らないんだから分らないで先輩使えばいいよな。

「分かりました」しぶしぶ。

「あだ名は何がいい？」

「イチローかな」

「じゃあ、松井って言うのはどう？ ……待てよ、そうだイチマツっていうのはどうだろう？」

「いいですね、それ」

振り返ると社員の一人が良いと言っている。

「この子はこの社でも優秀な情報部に所属している。サカベ君だ」
サッカー？ ベツカム？

「おい、イチマツ、早速仕事だ」

「さすがが社員、情報の伝達はリニアモーターカー並だ」ポンと肩をたたく。「がんばってくれたまえ」

ここからいろんなところに行つてホラーを味わうのだろう。第六感
は卒業だ。

翌日も通勤。

「俺は双務だ。いろんなことを聞いてくれ」

双務は同じホラー記者部。

しばらくしゃべってコミュニケーションしていると、知りたかつた情報が分かった。サカベはサッカーとベツカムじゃない、ただの名前だつていうこと。どうしようもない事実だ。

「野球もうまいんだろ？」

「それより、この部って六人じゃないんですか？」

「幽霊が一人いてね」

幽霊？ 詳しく聞きたい。

「それはどういう？」

「奇跡を起こせるたった一人の助っ人さ」

「じゃあ、僕は名前の通り野球がうまいです。甲子園に行こうと思

「たくらいですから」

「でも無理だったのか」

「まっ、運がなかったんです。僕はそれをトラウマに運を磨いてきたんです」

「じゃ、その運で競馬を当ててくれないか。経費が足りなくてさ」「運で博打かあ、いいっすよ」

今外見えていて思った。世界は広いんだなあと、どうしようもない不良、美しいカップル、このビルからはいろんな人が見える。

「当たった、すごいイチマツ」

「あっそうですね。でも努力もせずできることがあるって恨まれるんですよ」

「悪いことをしたな、情報を止めておくよ。それでも社の中で一番の情報屋と友達なんだ」

「僕は、そんなことをしてもらったために会社に来たんじゃありませんよ。情報なんてどうでもいいんです。僕にはすべきことがある」

「盛り上がってるところすまない。社長からの仕事」

「あっ、ワン！」

「どうした友よ」

抱き合う二人。

またしても僕は世界の広さを突きつけられた。今見ていることは今だけのことだ、忘れてたまるか。

「ゴニョゴニョ」

「はぁーん、オッケー」

……

「情報操作は俺の仕事だ。お前はお前らしくやればいいんだよ」

「うん、怒ってごめん」

「気にすんなよ」

ここから新しいスタートが始まる気がする。

「キヤー」と叫ぶ練習をしておいてくれ。ホラー小説の名に懸けて。

「ブローク」(後書き)

是非是非、感想を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0975f/>

ホラーリン

2010年10月14日12時51分発行